

故蒔田栄一教授 追悼

松 田 福 松

去年（昭和四八年）一二月、感冒の身を押しして講義に見えて居られた先生が、遂に御入院になったとのことで、新学年への入試問題の件もあり、新年に入って間もなく、御入院先の東京中野の聖母病院の一室に先生をお見舞申し上げた。その時はもう、ベッドの上に起き直られて、肺炎の症状は全く去ったが体力がまだ十分でないので、近く退院の上、会合にも出よう、とのお話であった。それが新学年になってもお見えにならず、以前より悪かった腎臓の症状が重くなられ、その方の専門の医師と治療設備の整った虎の門病院に移られた由を承って、川崎市溝の口の分院にお訪ねしたのが六月二日の日曜日であった。お付添の奥様のお話では、治療の手順も確定したので九月には出講も可能とならうか、とのことであったが、直接お会いしてみると、大分御衰弱の御様子で、まともにお話も憚られ、無言のうちに手を握って御快癒をお祈りしてお別れ申し上げて来たのであった。足掛け十年、大学創立以来、いつも大船に乗った気持で先生に寄りかかって来た我々にとって、先生の計は大きなショックであり、発展途上にある大学としても、古稀を越えられたとは言へまだまだ先生に期待するところ多大なるものがあつたことを思へば、実に痛惜痛悼已み難きものがあるのである。

先生は、戦前、旧東京府立一中から小樽高商の教授として、我国英学界にその人ありと知られ、戦後は東京千駄ヶ谷の津田スクール・オヴ・ビジネス、亜細亜大学等の教壇に立たれるとともに、同じく高田馬場の高田外語を主宰して、戦後における民間英語教育界の総本山と仰がれる勢威を示された。またライオンズ・クラブの一員として国際的
社会人たる信望を荷って活躍して居られたのである。

先生の英語は、深く且つ広い英文学の素養に裏付けられた醇乎たる英国紳士のそれであって、London 英語の雰囲気
にひたるため二三年毎に渡英して居られ、London の世界的に有名な Waldorf Astoria Hotel の手厚く奥床し
い英国流 hospitality をいたく好まれてその常連となって居られた。この宿を根拠として、London に数多い英文学
史上の名所旧跡に杖をひいて文学散歩を試みることを何よりの楽しみとせられたのであって、大学の研究会における
先生の最後の講演となった十一月例会の席上にあっても「London の印象」と題して、Café Royal の一隅に座して
Oscar Wilde の在りし昔を偲びこれを以て自分の Wilde 研究を完了したと語られたほどである。同じ講演の中に
は、Dr. Samuel Johnson から G. B. Shaw に至るまで London に因みある幾多英国文豪の名が挙げられ、先生
の渉猟の広きを思はしめられた。

先生はまた、広く文壇・歌壇の風格ある人々と交流をもつ文雅の人であられた。平素、大学のプロゼミナルにお
いて、担任の学生には英語を講ぜられる前に先づ万葉集以下古今の名歌から選ばれた先生愛誦の和歌数首を授けて、
全人的情操陶冶に資することを忘れられなかった。数年前、英国の貴族病・痛風に悩まれた当時、ふと洩らされた述
懐のお歌の一節——くすりくすりとして過ぐすこのごろ——の自嘲のひびきが、今もなほ筆者の胸に焼きついて離れな
い。願はくは、先生々涯の時に逢ひ折にふれての名篇佳什を網羅して、先生の真面目を永く後世に伝えることが出来
たならばと、先生の御逝去を惜しみ、在りし日の御面影をお慕はしく偲びまゐらすにつけて、切に切に願はるるとこ
ろである。

(昭和四九年七月八日)